



「雨にも負けず」

雨にも負けず

風にも負けず

雪にも夏の暑さにも負けぬ

丈夫なからだを持ち

欲は無く

決して瞋（いか）らず

何時も静かに笑っている

一日に玄米四合と

味噌と少しの野菜を食べ

あらゆる事を自分を勘定に入れずに

良く見聞きし判り

そして忘れず

野原の松の林の陰の

小さな茅葺の小屋に居て

東に病気の子供あれば 行って看病してやり

西に疲れた母あれば 行ってその稲の束を背負い

南に死にそうな人あれば 行って怖がらなくても良いと言い

北に喧嘩や訴訟があれば つまらないからやめろと言い

日照りのときは涙を流し

寒さの夏はオロオロ歩き

皆にデクノボウと呼ばれ

ほめられもせず苦にもされず

そういうものに

私はなりたい

宮沢賢治

## 人の幸せを願う

梅雨になり、雨が降る日が多くなってきました。

この詩については、ご存知の方も多いでしょう、宮沢賢治の「雨にも負けず」の全文です。心を打たれる詩ですね。

賢治自身は、質素な生活をし、人に認められようという思いをもつような人ではなかったそうです。この詩からは、困った人に手を差し伸べたいという賢治の優しい気持ちが読み取れます。

“東に病気の子供あれば 行って看病をしてやり”

“西に疲れた母あれば 行ってその稲の束を背負い”

“南に死にそうな人あれば 行って怖がらなくても良いと言い”

“北に喧嘩や訴訟があれば つまらないからやめろと言い”

今の時代は、「自分がよければそれでよい」「周りに困っている人がいても関係ない」という利己的な考え方をしている人が多いように思います。誰もが自分のことが大切で、幸せになりたいと願っています。それは、当然のことでしょう。しかし、それだけでいいのでしょうか。賢治のように人に手を差し伸べ、人を幸せにすること、その人の喜ぶ姿を見ることで、自分も幸せに感じることができるようになりたいものです。

仏教の教えで「忘己利他（もうこりた）」という言葉があります。これは、天台宗の最澄教祖の教えで、“己を忘れ他を利する”という意味です。“自分の幸せだけを追求しても本当の幸せにはなれない、人のためを考えて行動することが自分の幸せにもなるのだ”と最澄は教えてくれています。

世界に目を向けると、戦争や紛争が起きている国があります。そして、食べることができない人、病気で苦しんでいる人等、命の危機に瀕している人がたくさんいます。「よその国のことだから関係ない」「自分には関係ない」という考え方ではいけません。思いを寄せることが大切です。日本から宮沢賢治の考え方、最澄の教えを世界に発信したいものです。

文責＝青少年育成センター指導員 藤村